音楽科

【テーマ】鑑賞指導の充実を通して、「見る・聴く・愛する」力を子どもに育てる

1　本校において音楽科学習が目指すもの

“みらい”の学習で培われた成果は、確実に音楽科の授業へも実を結んでいる。すなわち、合唱や合奏など自らの課題が明確になれば、即座に学習に取りかかり、個人あるいはグループで、パワフル・ダイナミックに課題を追求していく子どもたちの姿である。まさに“みらい”での「自分にとって具体的であり自然な学び方を学ぶ」豊かな経験に裏打ちされて、自ら課題に向かって学習を進めていく自信と意欲に溢れている。さらに“みらい”で学習された内容には、さまざまな事柄の価値を吟味したり、意味を考えたり、“ほんもの”を追求しようとする経験が積み重ねられているところから、音楽的にもきわめて知的好奇心の強い子どもたちが育っている。このような姿は、楽器やＤＶＤ、ＬＤ、ビデオなど視聴覚教材を用意したときに顕著である。いま、この特性を生かす音楽科の単元開発が求められている。

では、音楽科学習によってどのような子どもを育てるのか。

小学校学習指導要領が掲げる音楽科の目標（下表）を、ひとまず概観的に分析する。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

《方向目標「豊かな情操を養う」》を中心に、《活動内容「表現及び鑑賞」》によって、《３つの達成目標「愛好する心情」「感性」「基礎的な能力」》から迫るように構成されている。「豊かな情操を養う」は生涯学習における方向目標でもあるが、その姿を端的に考えてみたい。例えば、子どもたちが成人となったとき「年収の 10 ％（5 ％）は、音楽的な生活に使おう！」「行政は、税金の 10 ％程度は音楽文化のために出していい！」とする人間を生むことだと考えればどうであろうか。育てるべき子どもの姿が鮮明になる。「豊かな情操を養う」とは、人から「あなたの人生を、音楽は豊かなものにしてくれていますか？」と問われて、行動は伴わず、ただ「はい」と答えるだけのものでは決してないはずである。

2　『わたしの学習』における音楽科学習

研究・実践のテーマは、

鑑賞指導の充実を通して、「見る・聴く・愛する」力を子どもに育てる である。

このテーマに基づき、次のような仮説を立てた。

◎視覚的、聴覚的、あるいはそれらを統合した多角的な鑑賞活動によって、深く音楽を愛する子どもたちが育つのではないか。

◎内発的な動機に支えられた子どもたちは、表現活動も含め音楽を生活の中に積極的に取り入れようとするはずである。

（1）「見る」視点を加える

鑑賞指導というと、「聴く」ことに注意が向けられがちであるが、音楽は本来 **Live**（ライブ＝生の）であることを考えれば、「聴く」に加え「見る」視点を持つべきであろう。

教室で「見る・聴く」鑑賞教材を用意することによって、「見れば分かる」と理解が進むだけでなく、「あんな風にやってみたい・なってみたい」と、映像がモデルの働きも為す。

「見る・聴く」が**「愛する」**気持ちを生むのである。

学校現場では、様々な形態の演奏を常時実際に見るわけにいかない。そこでいま、従来のビデオやＬＤ（レーザー・ディスク）に加え、再生機械が手近となったＤＶＤ（デジタル・ビデオ・ディスク）に注目する。画質・音質・保存性ともにすばらしく操作性がよい。映像を取り入れた教材編成を、広く行っていきたい。

（２）映像教材の活用

学級で映像を活用する際のポイントは、視聴後、映像に登場したいくつかの場面をクイズ形式などで確かめてみることで、必然的に視聴が繰り返しが行われていくことである。映像教材はおおむね次の通りである。

①オーケストラの演奏や世界各国で使われる楽器やその奏法。②いろいろな合唱の形態（滝廉太郎の歌曲）。③ミュージカルやバレエや歌劇などの舞台芸術（「サウンド・オブ・ミュージック」「キャッツ」「くるみ割り人形」「ヘンゼルとグレーテル」「魔笛」など）。③踊りの音楽に関連した舞曲などの映像（ウィーン古典舞踊団による「メヌエット」など）。④ライブ映像による演奏の様子や音楽会の雰囲気（ウィーンでの「ニュー・イヤー・コンサート」やロンドンでの「プロムス・ラスト・ナイト」「blast〈ブラスト〉」など）。⑤日本各地や世界各地での歌や演奏、音楽を伴った踊りやお祭りの様子。⑥様々な独奏楽器奏者の演奏やドキュメント。⑦作曲家や音楽作品の背景となる映像（「名曲アルバム」や音楽ドキュメンタリーなど）。⑧音楽を素材にしたアニメーション（ディズニー映画「ファンタジア」「ファンタジア 2000」など）。

事例：2003 年夏に初来日したエンターテイメント・ショウ・バンド[blast]。来日を前にロンドンでのライブがビデオ・ＤＶＤで発売された。オープニングはラヴェル作曲の「ボレロ」。続きレスピーギ作曲の「ローマの松」。金管楽器や打楽器群に圧倒される。音楽に合わせたダンスもすごい。プログラム中ほど、全米№ 1 の小太鼓奏者によるアクロバティックなソロやアンサンブル。子どもたちは、ステージに登場する様々な楽器や奏者たちを見て、瞬くうちに音楽の虜となった。

（３）関連教材を駆使する

音楽鑑賞教材には、他の芸術分野と違い作品による類別と演奏家や編曲による類別がある。同一作品で複数の異なる演奏を収集することができるわけだ。そのような中、ねらいに即した教材選択は授業展開をエキサイティングなものにする。

さらに、収集した同一曲の異なる演奏を聴き比べたり、表現へとつないでいくことによって、音楽のよさや美しさを感じ取ったり、味わったりする鑑賞の活動を仕組むことができる。教材収集の結果なされる子どもの心を開く教材選択が、授業で鑑賞を生かす大きなポイントとなる。ここでは必ずしも映像教材は必要としない。「聴き比べる」活動が中心となる。

事例：山田耕筰の歌曲「待ちぼうけ」。独唱（バリトン、ソプラノ：ピアノ伴奏、テノール：邦楽器による伴奏）、重唱（テノールとバリトン）、合唱（アカペラ）など 5 種類の演奏を集める。ユーモラスな歌詞に親しんだり歌ったりした後で、聴き比べの活動にはいる。自分のイメージに合った演奏を 5 種類から選ぶ。「人の声の特徴や声の重なりを感じ取って聴く」ことで、「音楽のよさや美しさを味わう」高学年の目標へと迫ることができる。

（４）その他のポイントとして

①同じ題材の曲を収集して聴き比べる。**例：**「世界の遊び歌」や「動物をテーマにした音楽」（サン＝サーンス作曲「森の奥深く住むかっこう」、ヨナッソン作曲「かっこう」、スイス民謡「かっこう」〈演奏〉フィリップ・ジョーンズ・ブラスアンサンブルなど。②同一曲をいろいろな演奏で聴き比べる。**例：**サン＝サーンス作曲「白鳥」をバイオリンやコントラ

バスなどチェロ以外の楽器を使った編曲や〈マイヤ・プリセツカヤ〉のバレエで見る。③同じ楽器や同じ種類の楽器で、使われ方や音色を比べる。**例**：「谷茶前〈三線〉」「津軽じょんがら節〈太棹の三味線〉」「こきりこ節〈細棹の三味線〉」で、三味線の音色を比べる。

２．鑑賞指導の組み立て方

（１）《感じを共有・気づきを課題に》を基本とする

授業では、音楽を聴いて感じてそれを自分の言葉に直して発表する。40 人いれば 40 人の感じ方がある。同時に、同じ感じ方をし同じ気づきをするのではない。気づきは教師が意図する範囲を超えて、同時多発的、しかも多様性をもって行われる。学級で音楽を鑑賞する意義は、意識や感じ方のズレ、気づきの時間差が、再度の聴取を求め、一人ではおよそ希にしか経験できない聴き深める活動を可能にすることにある。鑑賞指導の基本として、①自分の経験を生かして聴くことで、他の人と「感じ」方の違いを分かち合う聴き方。②聴いて「気づき」を出し合って、それを課題にして、みんなで確かめてみる聴き方。の２つがある。

（２）指導のねらいを焦点化・ステップ化する

いまから取り扱う曲を、子どもたちが「何度も聴きたい」という授業を、いかにすれば組み立てられるか考えたい。鑑賞指導の核心はまさに「何度も聴く」ことにあるからだ。

いろいろと変化する目当てが生み出す、必然性を持った繰り返し行われる聴取活動には、「発見」があり「定着」があり「安心」があり、「味わい」や「変化（変容）」を子どもたちにもたらす。

事例：中学年で「曲想の変化をとらえることができる」というねらいを設定した。教材はエルガー作曲「愛の挨拶」（オーケストラ編曲）。このねらいにすべての子どもたちを到達させるためには、やはり必然的に何度も繰り返し聴くいくつもの活動を仕組まねばならない。まず、子どもたちに「どんな楽器が使われているのだろう」と、目当てを持ちながら聴かせていくことにした。たくさんの楽器を聴きながら確かめていく中で、「最初のふしが何回出てくるかな？」と投げかけてみる。最初は漠然とした聴き方であったのが、最初のふしが出てくるたびに指折り数えて、何度も聴き深めていくうちに、「あれ、似たふしが出てくるぞ」「あれあれ、違うふしがどんどん出てくるぞ」「曲の感じが変わったな」「いつ、同じふしが出てくるのかな」「今度は最初のふしが楽器を違えて出てきたぞ」などと、いろいろな曲想の変化にも気づき始める。次に、シュトラウス作曲の「ピチカート・ポルカ」と曲全体の感じの違いを比べてみる。「愛の挨拶」を十分に聴き込んでいるものだから、子どもたちはすぐに、レガート（なめらか）とマルカート（一つ一つ音を区切る）のような曲想の違いも感じ取って聴くことができたのである。

（３）表現活動との関連をはかり、知識・理解事項の充実・定着を図る

表現の内容を高めるために、次のような鑑賞活動を工夫することができる。

事例：文部省唱歌「とんび」の歌詞を使う。豊かな響きを持つ自然で無理のない発声を求めて、ア段とオ段の文字のすべてに丸印を付けさせる。付け終わった子どもたちをオルガンの前に集め、口形を考えたり呼吸や発音の仕方を工夫したりして歌わせてみる。次に「丸印を入れた文字のところを、どんな顔で歌っているか想像しながら聴いてごらん」と指示し、範唱ＣＤを聴かせる。その結果、１つ１つの言葉の響き具合まで詳しい聴き取りが展開されて、一挙に発声への関心が高まる。表現を通し予想を持って聴くことで、範唱ＣＤも立派な鑑賞教材となる。さらに「とんび」一番の中で、「３拍伸ばすところ（付点二分音符）がいくつあるか」教科書を見せないで範唱ＣＤを聴いて考えさせてみる。答えは４カ所である。拍の流れを意識して初めて聴き取れることであるから、聴き取った後の歌唱では、驚くほど音符の長さが生かされた表現活動が展開される。